

T・W・シュルツ

『世界農業の経済的危機』

T. W. Schultz, *Economic Crises in World Agriculture*, The University of Michigan Press & Toronto, 1965, 114pp.

持田 恵 三

シュルツの農業問題についての理論は、あまりにも有名であり、現在では研究者にとって必須の経過点になっている。この書は、そのシュルツが現在の世界農業を問題にした最新作である。これは第一章 経済的アプローチ、第二章 伝統的農業、第三章 伝統的農業からの経済成長、第四章 近代農業の四章からなる。

シュルツがいう世界農業の危機とは何なのだろうか。簡単にいえば農業生産を發展させたいところでは増産がうまく行かず、農産物過剰を調整しようとするところでは過剰がますますひどくなっているという矛盾である。その結果としてアメリカ、カナダ等の巨大な過剰農産物在庫とアジアの食糧不足とが共存す

書評 T・W・シュルツ『世界農業の経済的危機』

ることになる。現在アメリカが公法四八〇条によって、食糧不足の後進国への食糧援助として行なっている過剰農産物の吐き出しは、世界的な食糧のアンバランスの調整ではあるが、その受入国の農産物価格を圧迫し、その生産を停滞させる作用をしている。このことは、後進国が農産物輸出によって外貨をえて近代化の道を歩もうとしているとき、先進国が経済援助という形でその成長の達成を阻げるような農業政策を追求していることなのである。アメリカ、西欧の農業奨励金政策は、高度工業国の比較有利性が、工業ではなく農業にある証拠だと考える人がいる程に進んでいる。この不足と過剰という世界農業の矛盾の背後には、後進国の伝統的農業と先進国の近代農業というインドとアメリカに代表される農業のタイプがある。経済發展のなかでこれらの農業は、それぞれ前記の食糧問題と農産物過剰問題を生み出すのである。

このような世界農業の把握はシュルツの旧来のシエーマのくり返しである。ただこの書ではこのような問題が、具体的な歴史的經濟發展の過程のなかでの実践的な課題として、設定されているように思われる。そしてこの書の大半（一〜三章）は食糧問題、つまり伝統的農業が經濟發展Ⅱ工業化において直面する問題にあてられている。序文はつぎのようになっている。

「經濟發展においては、停滞的な抑圧された農業が危機をも

たらずようなある接合点がある。諸国はつぎつぎにこの場合に到達した。これらは工業生産の拡大に努力を集中した国々である。しかし工業化の一本道の追求は成長の極大率を達成するに十分ではない。経済的機会の欠乏のために、農民は農業生産を増加させるべく貯蓄したり投資したりしない。農業における進歩の欠除のために工業化は困難におちいる。そのとき危機はおとずれる。アルゼンチンではそれはペロン体制の間にきた。中国の工業化は五〇年代後半に停滞へとたどりついた。ソ同盟も例外ではない。インドの危機は飢餓のおそれ呼びもどした。一方そんなに劇的ではなくても、低開発国の多くはこの接合点にある。おくれてではあっても、彼等はすべてのがれがたく次のような問題点に直面しなければならない。『農業について何がなさるべきなのか』。

「何がなさるべきか」を問われている伝統的農業についてのシュルツの考え方は、かなり独特なものがある。つまり「伝統的農業は長期にわたって確立された経済的均衡の下での農業からなる。……これと鋭い対称をなして、近代農業は一般にある不均衡状態——慢性的な動態的な経済的不均衡——にある」(一三―四頁)。伝統的農業が均衡状態にあるということは、あたえられた条件の下で農民はその土地、資本、労働を合理的に、すなわち極大に利用しているということであり、逆に不均

衡にある近代農業こそ生産可能性が十分開発されていないことになる。だから広く支持されている伝統的農業における偽装失業の仮説は、伝統的農業にはなく近代農業にあてはまるのである。

伝統的農業の低生産力、停滞性には二つの基本的説明がなされている。一つは農民が怠惰を好み、節約を評価しないという「神話」である。もう一つは農民の生産能力を過大視し、現実の生産の低さから農民を無能力とすることである。しかし、これらの説明は誤りである。貧弱な生産力↓限界収益の低さ↓貯蓄誘因の欠除、というのが事実であり、そのおかれた状態のなかで、農民は出来る限りの生産力をくみつくしている。だからこそ「伝統的農業は容易に経済成長に貢献することが出来ない。何故ならそれはそれが依存する技術の状態の経済的機会をくみつくしているからである」(三九頁)。重要なのは伝統的農業からの発展の理論であり、農業が相対的に安い経済成長の源泉になったときにのみ食糧問題は消滅する。

その方法は何なのだろうか、より以上の土地の供給であろうか。そういう国もある。しかし一般には古くから農業を営んできた低開発国にとっては、既耕地からの増産が行なわれなければならない。そのためには農業への投入——資本投下が必要である。とくに農業外からくる金肥、機械、改良品種等、つまり農

業投入物の質の改良が必要である。そしてその投入物が適切な価格で供給されるように改善されなければならない。後進国の農民が価格に無関心であり、逆方向に反応するという理論は間違っている。投入物の価格を下げ、生産物の価格を上げることがやはり重要である。

伝統的農業をはなれて近代的農業について、第四章は四つの設問からなっている。第一にアメリカでの農業生産性における成果の源泉は何なのか。第二になぜソビエットは生産性のこれらの源泉を発達させることが出来ないのか。第三に生産性の上昇の結果として農民が蒙っている損害を再配分する基礎は存在するか。第四になぜ農民は我々の福祉国家の多くの社会サービスにあずかれないのか。アメリカのような代表的近代農業が直面している農業問題は第三と第四である。近代的農業は伝統的農業とは逆に、生産力の発展が農民にきびしい経済的圧迫をもたらし、調整、すなわち農業からの資源の移動がうまく行かないからである。ここでは経済進歩の果実は生産者より消費者に分配されている。しかもこの生産者の損失は蓄積的であり長期にわたる。だから調整過程を加速するとか、それでも損失を蒙む人々には補償するとかいう方策が必要である。第四問への主な解答もまた、この第三問と無関係ではない。パリティ価格、所得均衡、作付割当、政府支出等の価格・生産計画(Pricing and Production Programs)の存在が、この問題をおおいかくし、それへの無策をもちらしている。しかしこのプログラムは決して農民の厚生、富、所得の分配の不平等、貧困の原因を除去しないで、反対に所得の分配の不平等を一層悪化させるものなのである。農民のための福祉サービス(とくに学校)は、価格政策等とは別途に、非農業者と同じ程度に拡大されなければならない。

シュルツの農業理論の魅力はその明快なシェーマ化にある。そしてその画期的な功績は農業問題を農業内部の問題としてではなくしに、経済発展という動態的な過程において、農業部門と他部門との間に発生する問題として扱ったことにある。本書もこのような理論の上で世界農業という巨大な対象を一貫して処理しようとしている。後進国の経済発展の過程において、農業と工業の発展不均等、農業の立ちおくれば食糧問題を生み出し工業化は困難におちいる。一方先進資本主義国では、食糧需要に比して相対的に大きな農業生産力の発展が、資源配置の調整の困難性といひまて農産物過剰と農民の相対的な貧困をもたらす。そしてこの食糧問題と農産物過剰問題の対立は、世界的規模における不均等発展の所産だということが出来る。

この雄大な構図はたしかに世界の農業問題の現状を適確にと

らえている。しかしこのシェーマの内容に立ち入るなら案外にそれが貧弱であり、たんなる図式に終っているようにみえてくる。たとえばシュルツの農業理論の母体をなす先進国の場合をみて、それを一律にアメリカ型の農業生産力発展→農産物過剰で割り切ることは出来ない。フランスはたしかに最近その道を歩んでいるが、イギリス、ドイツ、日本は決して過剰国ではない。シュルツは日本がやがて米の輸出国になるだろうとみているが(五頁)、最近のそれは逆の方向に進んでいる。これらの国ではそれなりに農業の立ちおくれが主要な問題になっているのであり、後進国の場合と同様に経済発展の足枷ともなりうるのである。

このことは、経済発展の阻害要因となるような農業の立ちおくれが、工業化のある段階に一度だけあらわれるようなものではないことを意味している。また農工の不均衡が先進国では過剰、後進国では不足という形に必ずしもなるのではないことを意味する。農業と工業の不均衡発展は長期的には、均衡と不均衡のくり返しとして現われてくる。それは有機体としての国民経済の歴史的発展の一局面である。そして国民経済の歴史的発展を、そのようなものとして規定するのは資本主義的生産様式なのである。不均等発展ということの根元には、資本制社会における生産の無政府性があるし、それがどのような農業問題

として発現するかということは、資本主義的生産関係の発展に規定されている。

この書の主要なテーマである後進国の伝統的農業からの発展についても多くの問題がある。伝統的農業を安定した均衡状態として把握るのは正しいかもしれない。その発展が後進国の経済発展の鍵であるということも周知のことである。そのためには生産物価格の引き上げと、生産財価格の引き下げが有効なことも正しいだろう。しかしこういった経済的刺戟が十分有効であるためには、生産主体たる農民の自由な生産活動が可能であり、またその果実が自らの手に入るような体制が出来ていなくてはならないだろう。土改地革こそ、これらの国々の農業発展の前提でなくてはならない。このような生産関係を捨象して、伝統的農業ではあたえられた技術の下での経済的機會がくみつくされていく、といってもそれはただ「存在するものは合理的だ」という以上のものではない。

こういった諸点をシュルツに期待するのは無理であろう。だが、こういった視点はさておいても、なお不満はのこされている。シュルツは、不均衡発展において農業の立ちおくれを強調する。そのために食糧は不足し、農業からの資源の解放は十分となり工業も停滞する。工業化の出発点に立っている国々についてはともかく、工業がすでにある程度確立した国々におい

て、この農工間の関係は余りに一方的にみられていないだろうか。工業の不均衡に急速な発展の停滞をもたらしているともいえるのである。シトウッキイが指摘しているように、不均衡発展 (Unbalanced Growth) とは、他の産業の停滞を代償として獲得されるある産業の急速な成長である。その絶好の例を最近の日本でみることが出来る。おそらくソビエト農業の問題もまたこれに入る。

シュルツの理論の一つの魅力がその明快なシェーマ化にあるといったが、それはまた重要な欠陥でもある。シェーマの固定化は、理論の内面的なダイナミズムを失わせるからである。前記の問題はその一つの例である。不均等発展の過程は、資本主義のメカニズムによって導かれる、農業と工業の有機的な相互依存関係のダイナミックな運動である。たんに部門間の資源移動、配置の適正化といった技術的な問題ではないのである。国際的な問題についても同様なことが指摘出来る。過剰と不足の対立という世界農業の矛盾は、たんに発展段階の相違というところで解消出来るものではない。先進国と後進国の対立は、先進資本主義によって一九世紀以来作り出された資本主義的世界経済内部における矛盾に他ならない。この矛盾は、発展段階の差を基礎として、帝国主義的世界が歴史的に作り出したものである。南北問題はその遺産である。

シュルツもアメリカの食糧援助が後進国の農業発展に阻止的に作用していることを指摘している。しかしそれ以上にはでない。世界農業の問題は、過剰と不足がどのような有機的な連関をもって存在しているか、そして過剰国から不足国（低開発の）への食糧の流れ、いわば不均衡の調整が、何故、「食糧援助」という形式を有力なものとしているのか、ということである。この問題への解答は、アメリカ等の先進資本主義国の農業政策、貿易政策、さらには帝国主義的世界戦略の解明なくしては与えられないであろう。それは明らかに「政治経済学」の課題である。そして世界農業の経済的危機の本質は、「政治経済学」の武器によってしか明らかにしえないのではないだろうか。

注(一) T. Scitovsky, *Papers on Welfare and Growth*, London, 1964, p. 108.